

# 文末の「かね」の意味・機能—「疑いの表現」としての位置づけ—

熊野七絵

## 1. 問題のありか

「あの人独身ですかね。」のような文末の「かね」は、話し言葉では頻繁に使用されているが、ひとまとまりの表現として独立して扱う研究は少ない。「かね」の独立した研究(山田1991、橋本1992)や、質問文の一例として扱った研究(南1985)では、「かね」は、「か」と「ね」の意味・機能の組み合わせによって説明されている。以下、先行研究での扱いとその問題点を示す。

### 1.1 南(1985)の研究

南(1985)は、終助詞や文末表現の研究を概観した上で、質問文の構造を以下のように示している(p.52)。

描叙	+	判断	+	表出	+	働きかけ
さまざまな内容		時、肯定・否定、その他各種		疑い(または不たしかの念)		反応要求

次の「かね」の文例(1)では、「か」は「表出段階」「ね」は「働きかけ段階」にあり、「か」の表す「話し手の疑い」に「ね」による「相手の反応を要求する」が加わったものとして

いる。

(1) 芝居でも始まるかね? (同:52、原文はカタカナ、下線は加筆)

しかし、「かね」にはこのような質問文以外の例も考えられ、この説明がその他の「かね」文に適用できるかどうかには疑問が残る。

### 1.2 山田(1991)の研究

山田(1991)は、「か」を回答要求をする「質問」、相手の発言などに対する確認として発話する「確認」、語用論的な「主張」とし、「ね」を確認「ねえ」を同意要求とし、その組み合わせで以下のような機能を担うことを示している。(pp.115-117 ()内はもとの例文番号)。

質問型のカ+ネ(確認)	回答要求のやわらげ
(2) 今出川までいくらですか <u>かね</u> 。	(同:115 (13))
確認型のカ+ネ(確認)	互いに確信がもてないことの確認
(3) そうですか <u>かね</u> 。	(同:115 (19))
確認型のカ+ネエ(同意要求)	不信の表明

(4) そうですかねえ。

(同：116 (23))

主張型のカ+ネ (確認)

より強い主張

(5) 聞いてるかね。

(同：116 (25))

しかし、右のような機能が生まれることは、「か」と「ね」の機能の単純な組み合わせでは解釈しにくい。「主張型のカ」に「確認のネ」が加わって「より強い主張」になるのならば、「質問型のカ」に「確認のネ」が「より強い質問」となるのが順当であるが、逆に「回答要求のやわらげ」となっている。また、「確認のカ」と「確認のネ」という重複した機能から「確信が持てない」という機能が生まれたり、「確認のカ」と「同意要求のネ」で「不信」という機能がなぜ現れるのか解釈しづらい。4つの関係や連続性も不明確である。

### 1.3 橋本 (1992) の研究

橋本 (1992) は、「か」を「疑い、問い」、「ね」を「同意要求 (同意)」とし、その組み合わせによって「かね」を2つのタイプに分けて説明している。

「かね1」疑い+同意要求

(6) 誰が来たんですかねえ。

(同：134 (1))

「かね2」問い+文体変化

(7) 君、どこか痛いのかね。

(同：135 (8))

「かね1」は、その組み合わせにより話し手が疑いを述べたて、聞き手にその疑いを共有してもらうことを要求するというものである。

一方の「かね2」は、「問いかけ」をあらわす。「かね2」は、「かね1」とは明らかに異なり、「年配の男性が、目下の人間に、ある程度丁寧と言う」というような文体価値を持つ (同：136) という。

橋本 (1992) は、「かね1」の派生的意味として「聞き手の存在を意識した疑いの述べたて」となることもあるとの考えを示し、この場合「ね」に、「同意要求」という意味すらなくなり、疑いの述べたての「かな」の「な」の丁寧形として働いている場合もありそうだと指摘している。また、「かね2」の「ね」は「同意要求」という意味をもつことができず、「ね」は心理的な親密さを示すものに転化しているという。つまり、「同意要求」という機能によって説明しようとしながら、その機能では説明できない (下線部) という矛盾を示しているのである。

橋本 (1992) が、特定の位相にのみ使用される「文体価値」をもつものとそうでないものを区別しているというのは重要な指摘である。南 (1985) の例(1)や、山田 (1991) の主張の「かね」の例(5)はこの「文体価値」を持つものと考えられる。これらは、橋本 (1992)

も指摘するようにその機能や丁寧体・普通体での現れにおいて、そうでないものと異なる特徴を持っていると考えられる。本研究では、この特定の位相にのみ使用される「かね」は考察の範囲からはずし、それ以外の一般的な「かね」の特徴を明らかにすることを目指す。

## 1.4 問題提起

このように、「かね」に関する先行研究では、「か」と「ね」の組み合わせによってそれぞれの説明を試みている。しかし、一部の用法しか取りあげていなかったり、説明に矛盾や問題があるなど残された課題は多いと考える。以下に、残された問題点を整理する。

### 問題点1：「かね」と問いかけ性

先行研究でも指摘のあるように、「か」で終わる文(8')と比較すると、「かね」で終わる文(8)は、疑いの述べ立てに近づき、問いかけ性が低いと解釈される場合がある。働きかけ段階で反応要求の「ね」が加われば問いかけ性が増してもいいはずなのに、なぜ問いかけ性が弱まるのか。

(8) 「あの人独身ですかかね。」 (作例)

(8') 「あの人独身ですか。」 (作例)

### 問題点2：「ね」(同意要求、確認)による説明

「同意要求」や「確認」という機能で、(9)や(10)のような例はどう説明できるのか。山田(1991)が「不信の表明」とした(9)のような例は、話し手と聞き手が一致の方向に向かうという「同意要求」の機能とは反対の方向に向かうものではないのか。(10)は、聞き手は知り得ないことであり、聞き手に「同意要求」や「確認」することは不可能である。「同意要求、確認」という機能は、「かね」の説明には不適當なのではないか。

(9) 相手の発言に対して異論を唱える場合

「そうですかかねえ。私はそうは思いませんね。」 (作例)

(10) A (聞き手) が知らない過去の事実についてBが答える場合

A 「ご主人と初めてデートした場所は？」

B 「どこでしたかかね。なにしろ20年も前のことですから。」 (作例)

### 問題点3：「かね」と「かな」

親しい友人に対する(8")のような発話と、先輩など目上の人に対する(8)のような発話は同じ発話意図を表すと考えられる。橋本(1992)や益岡(1989)では、このような「疑いの述べ立て」の普通体の「かな」と丁寧体の「かね」の対応関係を示唆しているが、その説明はない。「かね」と「かな」はどのように対応しているのか、またその場合「ね」と「な」はどのような意味を持っているのか。また、「かな」が一まとまりの表現として捉えられるのであれば、「かね」も同様にとらえられるのではないか。

(8) 「あの人独身ですかかね。」

(8") 「あの人独身かな。」

本稿では、「かね」に関わるこれらの問題点に統一的な説明を与えることを目指す。まず、特定の位相で使用される「かね」とそうでない「かね」を区別する必要がある。また、反応要求の違いなどによるさまざまな「かね」文のうちどのようなものが使用されるのかを確認し、その特徴を明らかにする必要がある。本稿では、仁田（1991）の発話伝達のモダリティーによる文の表現類型に基づいて、さまざまな「かね」文を整理し、考察する。また、丁寧体と普通体での現れも考察の観点に含めたい。そこで、「かね」の意味・機能の特徴を明らかにする方法として、さまざまなモダリティーの「かね」文に関する調査を行った。

## 2. 「かね」文の使用に関する調査

### 2.1 調査の概要

調査は、1997年11月から12月にかけて東京都内の大学でおこなった。被調査者は18～23歳の共通語話者男女10名ずつである。年齢を限ったのは、橋本（1992）が指摘する特定の位相に限られる「かね」との混同を避け、それ以外の「かね」を抽出し、その特徴を明らかにするためである。

調査の方法は、調査用紙に提示した「かね」文について、被調査者自身がその言い方をするかどうかを選択し、しない場合は自分の言い方を記述するものである<sup>注1)</sup>。

### 2.2 調査項目

調査項目は、可能なさまざまな「かね」文を、仁田（1991）の発話伝達のモダリティーに基づく文の表現類型の枠組みに基づいて分類したものである。発話状況や発話意図を明確にするため、各文には場面文脈も加えて提示した。また、普通体と丁寧体で使用状況が異なるのかどうかを明らかにするため、各場面には普通体と丁寧体を提示した。表現類型別調査項目の一部を表1に示す<sup>注2)</sup>。

表1 表現類型別「かね」文の調査項目例

表現類型	普通体	丁寧体	
働きかけ	命令	早くしないかね	なし
	勧め	食べてみないかね	食べてみませんかね
	依頼	それ持ってきてもらえないかね	それ持ってきてもらえませんかね
	誘い	お茶でも飲みに行こうかね	お茶でも飲みに行きましょうかね
表出	意志	私はコーヒーにしようかね	私はコーヒーにしましょうかね
	願望	あした天気にならないかね	あした天気になりませんかね
述べ立て	疑い	あの人独身かね	あの人独身ですかね
	納得	こんなところにいたのかね	こんなところにいたんですかね
問いかけ	判断	こういう書き方でいいかね	こういう書き方でいいですかね
	情意	どんなものが食べたいかね	どんなものが食べたいですかね

※文の表現類型は、仁田（1991）の発話・伝達のモダリティーによる分類に基づく

## 2.3 調査結果

「かね」の使用に関する調査の結果を示す。図1は、「かね」文を使用すると答えた人数の割合を使用率として表現類型別にまとめたものである<sup>注3)</sup>。

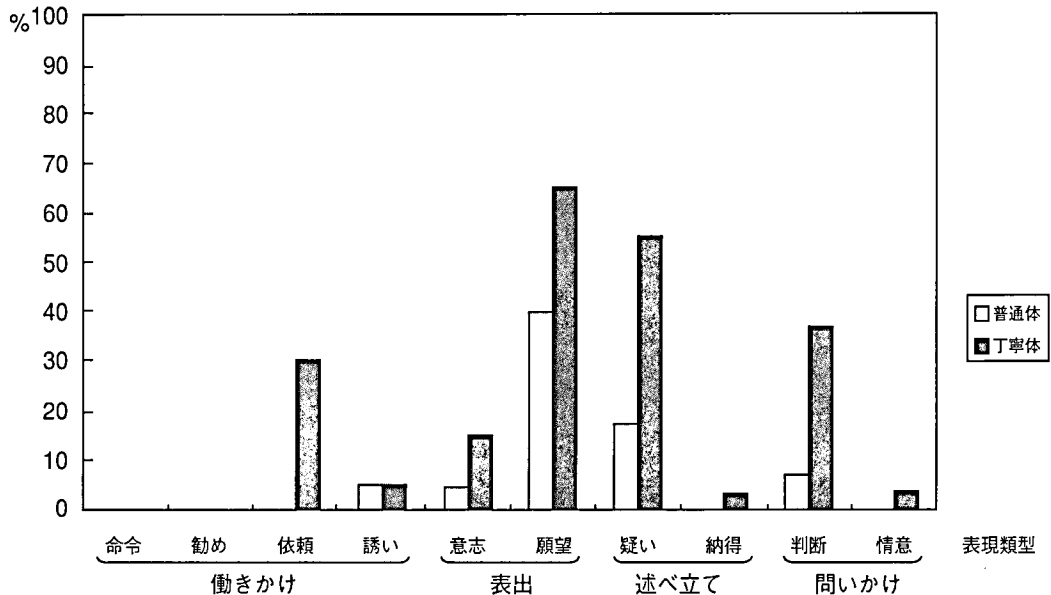


図1 表現類型別「かね」の使用率

使用率の高かったのは、「願望、疑い」であり、「判断の問いかけ、依頼」でも丁寧体での使用が見られた。「意志」の使用率は低く、「命令、勧め、誘い、納得、情意の問いかけ」の使用はほとんどなかった。丁寧体と普通体では、丁寧体の使用率の方が高く、普通体での使用は「願望、疑いの問いかけ」にやや見られたが、その他の使用率は低かった<sup>注4)</sup>。

## 3. 考察

### 3.1 「かね」と「かな」

表2は、調査結果の丁寧体での「かね」の使用と、普通体で「かな」で使用できるものの対応関係を示したものである<sup>注5)</sup>。「かね」の使用が認められたものは、普通体で「かな」に言い換えることのできるものであり、「かね」の使用が認められなかったものは、「かな」で言うとその文脈では不適切、不自然な表現となる。したがって、「かね」は「かな」と同様の機能を担っていることが指摘できる。

「かな」は、一般的には丁寧体とは共起しない。そのため普通体で「かな」が担っているような機能を丁寧体では「かね」が実現していると考えられる。今回の調査では、「かね」を使用するかという形で聞いているため普通体の「かな」と「かね」の使い分けに関して

表2 表現類型別「かな」と「かね」

表現類型		普通体	丁寧体
働きかけ	命令	#早くしないかな	なし
	勧め	#食べてみないかな	×食べてみませんかね
	依頼	○それ持ってきてもらえないかな	○それ持ってきてもらえませんかね
表出	誘い	#お茶でも飲みに行こうかな	×お茶でも飲みに行きましょうかね
	意志	○私はコーヒーにしようかな	△私はコーヒーにしましょうかね
	願望	○あした天気にならないかな	○あした天気になりませんかね
述べ立て	疑い	○あの人独身かな	○あの人独身ですかね
	納得	#こんなところにいたのかな	×こんなところにいたんですかね
問いかけ	判断	○こういう書き方でいいかな	○こういう書き方でいいですかね
	情意	#どんなものが食べたいかな	×どんなものが食べたいですかね

(#は、その文脈では使えないことを示す。○は使用あり×はなし。)

は明らかにできなかったが、少なくとも普通体では「かな（かね）」丁寧体では「かね」が「疑い、願望、(意志)、依頼、判断の問いかけ」の文で使用されるという共通の特徴と対応関係が明らかになった。

### 3.2 「かね」と「疑いの表現」

調査の結果において、「願望」「疑い」および丁寧体での「判断の問いかけ」「依頼」の使用率が高いことに注目したい。

仁田(1991)では、「疑いの表現」には「カナ、カシラ、ダロウカ、デショウカ」があり、「疑いの表現」による文は基本的に聞き手への問いかけを意図することなく話し手の判断成立への疑念を述べる「疑いの述べ立て」として機能することが指摘されている。この「疑い」は、派生的に「問いかけ」になるが、典型的な「問いかけ」とは異なる特徴をもつといわれている。

典型的な「問いかけ」とは、(a) 疑い (b) 情報所有の想定 (c) 問いかけの3条件を満たすものである(仁田1991、1997)。

(a) 話し手に不明な点があって、判断の成立を断ずることができない

(b) 聞き手がいて、話し手の不明な点を解決する情報を提供することができると話し手が想定している

(c) 話し手が聞き手に不明な点を解決するための情報提供を求める

一方、「疑いの表現」に関する個別の研究の指摘(森山1989、仁田1991、1997、三宅1993、牧原1994、カノックワン1996)をまとめると、「疑いの表現」による問いかけには次のような共通の特徴があるといえる。

- ・聞き手が回答できることを想定していない(上記の(b)を満たさない)
- ・回答の義務を軽減することによって丁寧さの表現効果を持つ
- ・聞き手の感情、意志など聞き手に明らかなことの「問いかけ」で「疑い」の形式を用

いるとぶしつけ、不自然になる。

今回の調査結果から、「かね」文の使用にも同様の傾向が見られることが明らかになった。まず、「疑い、願望」などでの使用率が高い。これらの表現は、「かね」であるからこそ「疑い」や「願望」という発話モダリティーを表すものであり（「か」のみだと「問いかけ」などに移行してしまう）、「疑いの表現」としての、「かね」の基本的な機能が果たされていると考えられる。一方、「判断の問いかけ」や「依頼」は丁寧体での使用が見られる。これらは、「か」のみでも「問いかけ」や「依頼」のモダリティーを表せるが、「かね」を使用することで情報や行為の提供を想定していない発話として、丁寧さの表現効果を生むという、「疑いの表現」の派生的機能として特有の問いかけの特徴を示していると考えられる。また、調査結果では、「問いかけ」の中でも、「判断の問いかけ」では使用が見られ、「情意の問いかけ」での使用が見られないという差が出た。「情意の問いかけ」とは、聞き手の感情や意志、意向などを問うものであるため、話者が判断を放棄する直接的な「典型的な問いかけ」の形式の方が適切であり、婉曲的な「疑いの表現」できくのは不自然あるいはぶしつけになるためと考えられる。

つまり、今回の調査結果には、「かね」と「疑いの表現」の共通の特徴が現れており、「かね」を「疑いの表現」と位置づけられることが示された。「疑い、願望、(意志)」においては「疑いの表現」としての基本的機能が、「判断の問いかけ、依頼」においては派生的機能が発揮されているといえる。

### 3.3 「か」＋「ね」による説明

ここで、「か」と「ね」の組み合わせでなぜ「疑いの表現」としての性格をもつのかについて再考してみたい。

まず、「か」については、芳賀（1954）以来指摘されているように、「か」自体は話者にとって不確定な要素があることを示しているだけである。「問いかけ」といった機能は、不確定な要素が聞き手に提示されると、その補填をするよう導かれるという語用論的な要因が加わって2次的に実現されるものだと考えられる。

一方の「ね」については、「かね」の先行研究では「ね」の「同意要求」「確認」などの機能によって説明されている。「ね」を聞き手との関係から考察する一連の研究（上野1972、鈴木1976、陳1987、大曾1986、森山1989a、神尾1990、益岡1991、伊豆原1993）では、「聞き手」話し手（聞き手情報優位）、あるいは「話し手＝聞き手」（共有、一致、とりこみ）などの観点から「ね」を説明し、「同意要求、確認」などの機能が示されている。これは「ね」自体が示している意味に語用論的な要因も加わった機能であると考えられる。田窪・金水（1996）は、「ね」について考察する際に、聞き手との関係における語用論的機能を排除する必要性を指摘し、「ね」自体は、話者が自分自身の認識や知識と照らし合わせている検索過程を示すものだとしている<sup>注6)</sup>。

「かね」の場合、「か」によって不確定な要素が存在することを、「ね」によってそれを

話し手自身の知識や認識と照らし合わせている過程を示していると考えられる。

「か」不確定+「ね」自己照合=「かね」

「か」で終わる場合、判断を放棄して聞き手に「不確定」要素を提示することで語用論的に補填を要求するものと受け取られやすいのに対して、「かね」では「ね」で自分自身の中で判断、確認している過程を示しているため、直接的に補填を要求しているとは受け取られず、基本的に話者自身にとどまるものと受け取られるのだと考えられる。

#### 4.まとめ

本稿では、さまざまなモダリティーの「かね」文の使用に関する調査結果から、「かね」が普通体の「かな」と同様の機能を主に丁寧体で果たしていること、「疑いの表現」と共通の特徴を持っていることを示した。これまで、「かね」についてはひとまとまりの表現としての位置付けがされていなかったが、「かな、かしら、だろうか、でしょうか」などと同様に、「疑いの表現」として位置づけることができると考えられる。「かね」のさまざまな用法についても、「疑いの表現」としての基本的機能と派生的機能の連続性において統一的に説明できることを示した。

また、先行研究では、「かね」を「か」と「ね」の組み合わせで説明する際に「ね」を同意要求や確認といった機能で捉えているため矛盾や問題が生じていることを指摘し、語用論的な要因を排除し、「か」は不確定を「ね」は自己照合を示すという新しい説明によってこれを解決した。

この解釈によって、前述の問題点は、以下のように説明が可能となる。

##### 問題点1：「かね」と問いかけ性

「かね」は基本的には「問いかけ」ではなく話し手自身の「疑い」を表明するものであり、「ね」によって自己照合していることが示されているため、不確定要素をそのまま提示し、補填に導く「か」で終わる文より問いかけ性が低くなるのである。

##### 問題点2：「ね」（同意要求、確認）による説明

「かね」の場合の「ね」を「同意要求、確認」と捉えることに問題があったのであり、「ね」は自己照合であり「かね」が話者に留まる「疑いの表現」であるとしたら(9)のように聞き手と不一致であろうと、(10)のように話者自身に限られ、聞き手に解答の余地がない発話であろうと矛盾しない。

##### 問題点3：「かね」と「かな」

普通体の「かな」と丁寧体の「かね」には対応関係があることが確認された。「ね」は必ずしも聞き手との関係においてのみ捉えられるものではない。「かね」と「かな」の場合、



語用論的な要因を排除すれば、「ね」と「な」は話者自身の自己照合の表示であるという同様の意味を表していると考えられる<sup>注7)</sup>。また、「かね」も「かな」と同様にひとまとまりの表現として「疑いの表現」に位置づけられることが示された。

本稿は、「かね」の使用に関する調査結果に基づいた考察であるため、他の疑いの表現との共通の性格を指摘することはできたが、その相違点については明確にできなかった。調査の対象外であった文体価値を持つ「かね」との関連とともに、今後さらに考察を進めていきたい。

付記：本稿は平成10年度日本語教育学会秋季大会での口頭発表「文末の『かね』について—全国共通語話者の使用に関する調査に基づく考察—」の内容をもとに加筆・修正を加えたものである。調査は、国際基督教大学の稲垣滋子先生、鈴木庸子先生、佐藤由紀子先生と被調査者の方々、また同行者の長岡順子氏の協力を得て行われた。ここに感謝の意を表したい。

## 注

- 1) 「かね」には、上昇、下降、「かねえ」と長くなるものなどさまざまなイントネーションが考えられるが、これら全てを含むものとして「かね」と表記してあることを明記した上で調査を行った。本稿ではイントネーションは考察しない。
- 2) 文の表現類型は、仁田(1991)に基づいているが、用語を一部改定、省略した。「誘いかけ」を「誘い」、「疑いの文」を「疑い」、「自問納得」を「納得」としている。「疑いの述べ立て」と「問いかけ」の違いは、相手の解答を要求しているかどうか、聞き手が知っているかどうかなどを場面文脈によって示した。また、「疑い」や「問いかけ」など、疑問文の種類(疑問詞疑問文、のだ文など)により複数の場面(文)を提示したものもある。丁寧体がない命令や独話場面などには、普通体のみ場面もある。独話場面は、表出や述べ立てなど独話も可能な文について、独話場面を設定したものである。
- 3) これは、複数場面を設定したカテゴリーについても、カテゴリー内で下位項目間に傾向の差は見られなかったためである。
- 4) 「かね」の使用には個人差があり、普通体では「かね」は使用せず、「かな」を使用するという人や丁寧体でも「でしょうか」のみを使用するという人もいた。両方使用するという場合でも、普通体では「かね」より「かな」のほうが一般的とのコメントが多かった。「かね」の使用について性差は見られなかった。「かね」を使用しない場合に使用する表現としては、普通体では「意志、願望、疑い」では「かな」、「納得」では「か」、「問いかけ」や「働きかけ」では普通体の文末でおわるものが多かった。丁寧体では、同じく「でしょうか」や「か」で終わる文が多かった。

- 5) 本研究で行った調査は「かね」の使用の特徴からその意味・機能を明らかにしようとしたものであり、「かな」の使用については同様の調査は行っていない。「かな」の使用については先行研究での指摘や複数の共通語母語話者の判断によって行った。
- 6) 田窪・金水(1996)では、このような「ね」について命名はしていない。「自分の知識や認識と照らし合わせている過程を示す」ことを端的に表す表現として本研究では「自己照合」という用語を採用した。
- 7) 「ね」と「な」の意味・機能の共通性と相違については、熊野(1999)で言語変化の過程として説明を試みている。「な」であったところに「ね」という新しい表現形式が出現していく中で、聞き手配慮が必要な場合(待遇場面、丁寧体、聞き手目当て性の高い発話、女性)は「ね」に移行していき、聞き手非配慮の場合(くだけた場面、普通体、聞き手目当て性の低い発話・独話、男性)に「な」が残ったということで住み分けが生まれているが、基本的な意味は同一であると考えられる。

## 参考文献

- 伊豆原英子(1993)『「ね」と「よ」再考—「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から—』『日本語教育』80号 pp.103-114
- 上野田鶴子(1972)「終助詞とその周辺」『日本語教育』17号 pp.62-77
- 大曾美恵子(1986)「語用分析。『今日はいい天気ですね。—はい、そうです。』」『日本語学』5巻9号 pp.91-94
- カノックワン・ラオハブラナキット(1996)『「カナ」「カシラ」に関する考察』『日本語と日本文学』第23号 筑波大学国語国文学会 pp.1-12
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館書店 Pp.277
- 熊野七絵(1998)『文末の「かね」に関する研究—全国共通語と広島方言の調査を中心に—』 広島大学大学院教育学研究科修士論文 Pp.77
- 熊野七絵(1999)「言語変化の過程として見た『ね』と『な』」『教育学研究紀要』第44巻 第二部中国四国教育学会 pp.161-170
- 鈴木英夫(1976)「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」『国語と国文学』11 pp.58-70
- 田窪行則・金水敏(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3 pp.59-74
- 陳常好(1987)「終助詞—話し手と聞き手のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6巻10号 pp.93-109
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティーと人称』ひつじ書房 pp.275
- 仁田義雄(1997)「伊達さん、結婚するだろうか」『月刊言語』26巻2号 pp.24-31
- 橋本 修(1992)「終助詞複合形の意味分析」『国語学会平成4年度春期大会要旨』 pp.133

- 芳賀 綏 (1954) 「陳述とはなにもの？」『国語国文』 Vol.23 No.4 pp.47-61
- 牧原 功 (1994) 「間接的な質問文の意味と機能 —ダロウカ、デショウカについて—」『筑波応用言語学研究1』 pp.73-86
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』 くろしお出版 Pp.251
- 益岡隆志 (1991) 「終助詞『ね』と『よ』の機能」『モダリティの文法』 くろしお出版 pp.92-107
- 南不二男 (1985) 「質問文の構造」『朝倉日本語新講座4』 朝倉書店 pp.39-74
- 三宅知宏 (1993) 「派生的意味について—日本語質問文の一側面—」『日本語教育』 79号 pp.64-75
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」 仁田義雄・益岡隆志編 『日本語のモダリティ』  
くろしお出版 pp.57-120
- 山田 准 (1991) 「情報論における『カネ』の機能」『THE KANSAI LINGUISTIC SOCIETY』  
11 関西言語学会 pp.113-118